

第984回サントリー定期シリーズ

5月10日(水) 19:00開演 サントリーホール

第154回東京オペラシティ定期シリーズ

5月12日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第985回オーチャード定期演奏会

5月14日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

5/10

5/12

5/14

指揮：ミハイル・プレトニョフ

コンサートマスター：依田真宣

ラフマニノフ：幻想曲『岩』 Op. 7 (約12分)

ラフマニノフ：交響詩『死の島』イ短調 Op. 29 (約20分)

ー 休憩 (約15分) ー

ラフマニノフ：交響的舞曲 Op. 45 (約38分)

- I. ノン・アレグロ
- II. アンダンテ・コン・モート(テンポ・ディ・ヴァルス)
- III. レント・アッサイーアレグロ・ヴィヴァーチェ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等創造支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会(5/10)

協力：Bunkamura(5/14)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

ミハイル・プレトニョフ

Mikhail Pletnev, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 特別客演指揮者

一言では説明できない多才な芸術家。ピアニスト、指揮者、作曲家として魔法のような才能で、世界中の聴衆を魅了している。1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。1978年、21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダルおよび第1位を受賞し、国際的な脚光を浴びる。驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。

ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団ほか数々のオーケストラを指揮。ボリショイ・オペラでの『スペードの女王』指揮で大成功を収めているほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。

1990年ロシア内外の個人、団体より資金を得、ロシア史上初めて国家から独立したオーケストラとしてロシア・ナショナル管弦楽団(RNO)を設立。指揮者として東京フィルハーモニー交響楽団には2003年7月に初めて客演、以来定期的に招かれ、2015年4月より特別客演指揮者に就任。2022年には新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団(RIO)を創設。

楽曲紹介

解説＝一柳富美子

2023年はラフマニノフ(1873年4月1日-1943年3月28日)の生誕150年かつ没後80年の二重アニヴァーサリーである。命日と誕生日に挟まれた3月30、31日にはラフマニノフ国際シンポジウムが開催され、筆者も論文を携えてモスクワまで参加した。ラフマニノフは、世界的にピアノ音楽の巨匠・20世紀No.1のピアニスト、ロシア国内では最高のロシア歌曲作家及び名指揮者として認知されているが、管弦楽作品にも傑作が揃っている。今回のプレトニョフの選曲は、その管弦楽作品の名手としてのラフマニノフに焦点が当てられていて、しかも、人気の交響曲第2番、第3番ではなく、初期から最晩年までの隠れた名曲が並んでいる。

ラフマニノフ 幻想曲『岩』Op. 7

1893年夏の作曲。副題は英語からの重訳による誤訳で、正しくは《切り立った巖》とか《断崖》となる。「黄金色の雨雲が 一夜を過ごした/切り立った巨大な断崖の胸元で」で始まるレールモントフの詩の印象を受けて作曲したことに由来する。この詩の冒頭2行は本作品の題辞にもなっているが、作品自体は単に「切り立った断崖」と命名された。

この単一楽章の標題音楽的管弦楽曲は、同じ題辞を持つチェーホフの短編小説『旅路』からも触発されている。実際、ロシアの大自然を連想させる鬱蒼とした曲の雰囲気はレールモントフの『断崖』の世界を、曲の細部は老男と若い娘の出会いと別れを描いた短編『旅路』を音楽化している。当初は、この曲を大変気に入ったチャイコフスキーが初演の指揮台に立つことを約束していたが、コレラで急逝したために延期され、1894年4月1日にサフォーノフ指揮ロシア音楽協会オーケストラによって実現した。

曲は3つの主題を持つ序奏付きの自由な二部形式。序奏の低音域ユニゾンによる不気味な第1主題は「断崖」を表し、曲の後半で頻出する。フルート独奏の第2主題は陽光を浴びた黄金色の「雨雲」のテーマ、やや郷愁を帯びた歌謡的な第3主題はチェーホフの短編に基づく「実らぬ恋」を暗示している。第1部は第2、3主題が巧みに変奏・展開され、後半では立ちはだかる「断崖」の前に、「実らぬ恋」が首を垂れて、最後は静かに終わる。

【作曲年代】1893年 【初演】1894年4月1日、モスクワにて、ワシーリー・サフォーノフ指揮ロシア音楽協会オーケストラの演奏による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム)、ハープ、弦楽5部

ラフマニノフ

交響詩『死の島』イ短調 Op. 29

1897年3月の交響曲第1番初演失敗後、ラフマニノフは一時作曲を休んで指揮者に転向する。ここでも彼は唯一無二の才能を発揮、特に1904-06年のボリショイ劇場副指揮者時代は非常に充実していた。と同時に疲弊もした。加えて、1905年の第一次ロシア革命の余波が残るモスクワでの音楽活動が困難だと判断したラフマニノフは、作曲家として充電すべく、活動拠点をドレスデンへ移し、1909年4月までの3シーズンをこの地で過ごした。そんなドレスデン時代の最後を飾るのが、この交響詩《死者たちの島》（「死の島」も誤訳）である。

滞在中の1907年5月、「セゾン・リュス」を主宰するディアギレフ(1872-1929)からパリの音楽祭への出演を依頼された。そのパリ滞在中に、ラフマニノフは画家ベックリン(1827-1901)の代表作「死の島」の白黒複製画と出会い、そこからインスピレーションを得て、1909年春にこの交響詩を完成させた。ベックリンは全部で5つの「死の島」を残しているが、ラフマニノフが見たのは広く普及した第3作のモノクロ銅板複製画で、後年、フルカラーの原画を見た時、「原画を先に見ていたら曲は生まれなかった」と語ったという。

三部形式、ラルゴ、イ短調、8分の5拍子。切れ目なく20分以上にも及ぶ大曲

には、白黒の版画に描かれた死の島、冥界の海、渡し舟、それを漕ぐ渡し守カローンの様子が幻想的に広がる。この5拍子は主部と再現部を一貫して支配し、舟の不気味な揺れや冥界の永遠性を表現している。5拍子のオスティナートには途中から「ドシドラ」「ドシドファ」といった4音モチーフが絡み合い、ロシアの吊いの鐘の音の断片になっていく。「ディエス・イレ」と結びつける解釈もあるが、4音モチーフは決して引用とはいえない。変ホ長調、4分の3拍子の中間部では、光明と穏やかさが垣間見えるが、それも束の間、再びイ短調に戻り、5拍子による冥界が再現されると、闇と恐怖は一層深まる。最後に「ディエス・イレ」が完全な形で現れるのかと思いきや、「ドシドラ・シソラファ・ソミファレ#・ミ」と我々の予想を裏切り、またしてもロシアの葬儀の終鐘となる。

2つの世界大戦を背景にベックリンの原画はドイツで大流行し、ヒットラーが執務室にも飾っていたことは有名であるが、それより10年早くラフマニノフがこの絵に惹かれたのは、第一次ロシア革命「血の日曜日事件」がきっかけだとロシアの学者たちは分析している。

【作曲年代】1909年 【初演】1909年4月18日、モスクワにて作曲者自身の指揮による
【楽器編成】フルート3（1番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ、弦楽5部

ラフマニノフ 交響的舞曲 Op. 45

ラフマニノフの、最後にして最高の傑作。欧州から再び合衆国へ本拠を移した翌1940年の夏、ピアニストとして多忙を極めていたラフマニノフは、新曲譜読みの代わりに突如作曲を始め、しかも異常なほどの短期集中で完成させた。タイトルは『交響的舞曲』。この曲名に決定する前は、各楽章に〈昼〉〈夕暮れ〉〈夜半〉という副題がついていたことから、これはラフマニノフの自伝的幻想曲か、或いは普遍的な人の半生を扱った作品と推測できる。

4つの楽章に人生を重ね合わせた『鐘』Op.35とは異なり、『交響的舞曲』には子供時代がなく、音楽はズバリ人生真只中の昼から始まる。タイトル通り、3

つの楽章は様々な舞曲のリズムで構成され、第1楽章はトッカータの要素が加わった行進曲、第2楽章はワルツ、終楽章はジークの動きが容易に見て取れる。自作の交響曲第1番、『音の絵』、交響曲第3番などの断片、生涯敬愛したリムスキー＝コルサコフの遺作オペラ『金鶏』との著しい類似、ロシアの様々な鐘の音、そして「ディエス・イレ」の処理法……と、まさにラフマニノフの音楽の集大成になっている。

第1楽章：ノン・アレグロ、ハ短調、4分の4拍子。三部形式。冒頭、弦が刻むマルカートのリズムに乗って、主部主題の断片「ソミドー」の移調形が木管によって控え目に提示され、やがてモティーフが集結して主題の全貌が力強く姿を現す。嬰ハ短調の牧歌的な中間部では、ロシア民謡を彷彿とさせる抒情的主題を典型的なジャズ楽器であるアルトサックスが朗々と歌い出す。この主題はコーダでも再現されて楽章を閉じる。

第2楽章：アンダンテ・コン・モート（テンポ・ディ・ヴァルス）、ト短調、8分の6拍子。複合三部形式。弱音器を付けた金管の不気味なファンファーレが3回奏された後、ヴァイオリン独奏がこの楽章の旋律要素を全て提示し、それを引き継いでイングリッシュ・ホルンが哀愁に満ちたワルツ主旋律を歌う。新たな主題で自由な調性の中間部を経て、縮小された再現部となる。

第3楽章：レント・アッサイ、ロ短調—アレグロ・ヴィヴァーチェ、ニ長調。三部形式。〈夜半〉の副題が付けられていた終楽章は、真夜中の黒ミサ、或いは世界の終末が暗示されているかのように、グレゴリオ聖歌「ディエス・イレ」的要素に満ちている。聖書の終末論に則って、鐘が正確に12回連打される。

楽章冒頭及び対旋律として現れる「ラソラファ・ソミファレ」は、ラフマニノフが愛好し続けた「ロシアの鐘の揺れ」を表現するもので、「ディエス・イレ」と酷似することからこれまで大きな誤解を受けてきた。1935年に音楽学者の講義を聴いて「ディエス・イレ」の歌詞や旋律の詳細を初めて知ったラフマニノフは、従来の誤解を解くべく使い分けを明確に提示している。ここでは中途半端な4音や8音ではなくキッチリ7音を原曲の音程関係通りに引用し、しかも原曲第二連の旋律まで丸ごと引用している箇所もある。中間部ではお得意の抒情と幻想の世界が繰り広げられ、力強い再現部を経て、まるで自らの音楽の総括を示すかのように、「ロシアの鐘の揺れ」と「ディエス・イレ」が絶妙に絡み合って、ジークに踊り狂う魔女達の夜会は終わる。

【作曲年代】1940年 【初演】1941年1月3日、フィラデルフィアにてユージン・オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団の演奏による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（タムリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、鐘3、グロッケンシュピール、シロフォン）、ピアノ、ハープ、弦楽5部

ひとつやなぎ・ふみこ（音楽学）／ロシア音楽研究の第一人者。国際音楽学会ショスタコーヴィチ研究班アジア代表委員。ロシアオペラ・声楽・ピアノニズムに特に造詣が深い。ロシア音楽研究会主宰。ロシアン・ピアノ・スクールin東京総合監修。研究・執筆、声楽指導、音楽通訳・翻訳・字幕を手掛け、邦訳したオペラ等の大曲だけでも50を超える。